

舞踊の感情伝達に関する 因子分析的研究

—顔と身体の伝達の違いを中心に—

佐藤 節子

1. 目的

エクマンら¹⁾の感情の普遍的表出の研究によると、感情は主に顔に現れ、身体は緊張、窮屈、退却、攻撃などの感情の処理を示す事が指摘されている。この事を手掛りとし、踊り手の顔の表情の有無によって、世界の様々な舞踊の印象がどのように変化するかを見、更に舞踊における顔と身体のみ果たす役割を考察する事を目的とする。

2. 方法

各舞踊作品について、踊り手の顔の表情の有るビデオと、顔をモザイク効果で隠したビデオを用意し、合計16種類とした。一般学生138人を3グループに分け、見せる順番を変え、音楽を除去した。評定は、増山²⁾及び他の研究を参考にして35の形容詞を4段階の得点にする方法を用い、1作品ごとに評定を依頼した。期日は平成2年10月である。評定者の得点を平均化し、形容詞35語×舞踊作品16種の行列を求め、因子分析を行った。解法は主因子法である。

3. 結果と考察

固有値1.00以上の4因子のうち、第1因子の寄与率は61.4%である事から、データの半分以上は第1因子で説明されると考えられる。バリマックス回転後の因子負荷量が±0.67以上を示す形容詞を各因子を代表すると考え、次のように因子の解釈をした。

第1因子は「ダイナミック-スタティック」因子、第2因子は「伸展-屈曲」因子、第3因子は「恥じらい」の単極性因子、第4因子は「快-不快」因子とした。

図1は、第1、第2因子を軸とする平面上に因子得点を散布した図であり、太い矢印は、顔の表情の有無による印象の変化の方向を示すと考えられる。これらの矢印の方向より、舞踊作品は次の3つのグループに分類できると考えられる。

第1のグループは、踊り手の中立状態の顔を隠すと、ダイナミックな印象を強める方向へと変化する、沖縄の「諸鈍」、バレエ「瀕死の白鳥」、モダンダンス「湯女」、ハンガリーの「レゲーニッシュ」である。これらは、身体は力動性や伸屈を伝達し、顔はそれらを抑制する働きをしてスタティックな印象を強めていると考えられる。

第2のグループは、踊り手の笑っている顔を隠

すと、屈曲して不快な印象を強める方向へと変化するインドの「シバ神に捧げる踊り」とスペインの「ホタ」である。この2つは、エクマンが指摘するように、顔は快感情を、身体は力動性や伸屈を伝達していると考えられる。

第3のグループは、踊り手の目の動きが特徴的な顔を隠すと、伸展した印象を強める方向へと変化する、バリ島の「レゴンクラトン」と韓国の「ナルプリ」である。この2つは、顔は屈曲性を、身体は力動性を伝達していると考えられる。

4. まとめ

舞踊における顔と身体の伝達の違いを見るために、因子分析を行った結果、踊り手の顔と身体への伝達は微妙に異なる事が見出された。しかし、それらの伝達の違いは、エクマンの指摘通り、顔は感情を、身体は感情の処理を伝達するとは限らず、顔で身体への伝達する力動性や伸屈を抑制したり、屈曲性を伝達する場合もあることが推察される。

註

- 1) P. エクマン他著 工藤力訳編「表情分析入門」試信書房 1987 p.9~10
- 2) 増山英太郎「基本感情はいくつあるか—日本舞踊のイメージ調査を通じて」東京都立大学人文学部『人文学部』第183号 1986 p.17~42

図1 因子得点散布図と
各因子を代表する形容詞のベクトル方向
(太い矢印は同一作品の因子得点の顔の有る場合から無い場合への変化を示す)

